

世界を元気にした人は、日本も元気にできる

日本も元気にする JICA海外協力隊

Japan Overseas Cooperation Volunteers Stories

― 東北編 ―

JICA ジャイカ



JICA TOHOKU

01

星野 達郎

TATSURO HOSHINO

子どもたちと先生が未来に希望を持てる学校をつくりたい

「楽しく教える」ことを現地の教員たちに伝える

「海外に学校をつくりたい」という友人の志に影響を受け、JICA海外協力隊への参加を決めた星野達郎さん。

派遣先であるグアテマラのキチェ県にある教育事務所では、小学校における算数科教員の指導力向上や定着が目指されていた。そこで星野さんは、「教員同士が互いに学び合うしくみづくり」と「算数研修会」に取り組むことにした。「教員同士が互いに学び合うしくみ」とは、日本の教育現場で行われている授業研究のこと。教員が互いの授業を見学し、その授業を題材にしてどうすれば子どもの学力が伸びるのか学び合う機会を設けた。「算数研修会」は、星野さんや現地職員が講師となり、各校の代表教員を対象に算数授業の指導力向上に向けた研修を行い、研修の学びを自校の教員にも伝えるという内容だ。「現地の教員たちが教えることを楽しんでもらえるように、知識の押し付けにならないよう心がけました」と話す星野さん。子どもに学びを楽しんでもらうためには、まずは先生が楽しむことが重要であると考え、さまざまな工夫を凝らした研修会は、教員の間で「楽しい」と評判になり、15の街で開催されるに至った。

［現地での活動］グアテマラ

GUATEMALA



［帰国後の活動］青森県八戸市

AOMORI

人とつながることで価値を生み出していく

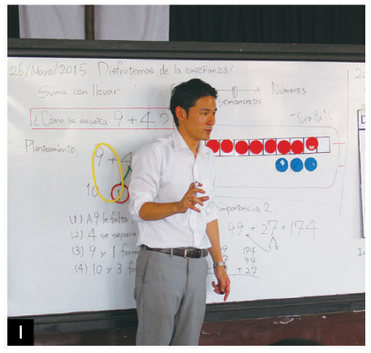
大学在学中は、漠然とした将来を思い描いていた。卒業後すぐに協力隊に参加し、「人とつながることで物事が好転し、大きな価値を生む」ということを実感。グアテマラで活動を行ったことにより見えてきた日本の課題を解決するため、教育の道へ進むことを決意した。現在は小学校で2年生のクラスを担任している。星野さんは、「子どもたちには、まず互いに興味を持って、自分の考えを自分なりのやり方で表現することを教えています。考えが同じでも違っても、それを受け入れて楽しむことが大切です」と話す。グアテマラと比較して、日本は本音が言えない子が多いと感じたからこそ、一人ひとりの自分らしさを引き出す指導方法を考えながら子どもたちと向き合っているという。

さらに、※モンテッソーリ教育の視点を取り入れた週末の遊び場「星のあそび塾」や、子どもの未来と向き合う先生たちのためのオンラインサロン「職員室NEXT」の運営、コロナ禍で苦しむ八戸市の「新むつ旅館」の支援などにも取り組んでいる。これらはすべて、協力隊経験を生かし、地域に飛び込み積極的に人とつながることで好転させてきた活動ばかり。そしてこれからも、教育現場の未来に大きな価値を生み出していくための星野さんの挑戦は続いていく。

※モンテッソーリ教育は、マリア・モンテッソーリが考案した、子どもの自己教育力に基づいた教育法。



先生のためのオンラインサロン「職員室NEXT」を運営。



1



2



3

1 2 各校の代表となる教師を集め、算数の研修会を開催。3 現地の方々と積極的に交流。

Voice



八戸市立柏崎小学校
三角 浩司校長

星野先生は、子どもたちが自分の考えや気持ちを素直に表現できるように、一人ひとりと向き合って教育しています。現場のICT化にもリーダーシップを発揮しており、今後の活躍も大いに期待しています。



八戸市立柏崎小学校
木村 智恵先生　畑中 裕子先生

星野先生はいつも明るく元気で、地域の方々に自分から話しかけたり、先生に向けた情報発信を積極的に行ったりと、海外での経験が生きていると感じるシーンが多々あり、頼りになる存在です。



子どもたちの明るい声が響く授業風景。

Message

心からおすすめできるチャレンジです

協力隊は、見知らぬ国に住み、現地の方と関係を構築しなければならないという大変な部分もありますが、それ以上に得られるものは多く、心からおすすめできるチャレンジです。帰国後すぐに何かが還元されるというよりは、この経験を軸にじわじわと人生が変わっていくということを、帰国後7年目の今まさに実感しています。

Profile

星野 達郎

八戸市立柏崎小学校 教諭

［派遣国］グアテマラ

［職種（活動分野）］小学校教育

大学卒業後、新卒で協力隊に参加。帰国後は、小学校の教員として教鞭をとりながら、異年齢間の子どもたちの交流を支援する「星のあそび塾」を八戸学院大学短期大学部と共催で運営しているほか、先生のためのオンラインサロン「職員室NEXT」を運営。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU
02
桶田 陽子
YOKO OKETA

雇用を増やし、地域を元気に!
地域農業の可能性を広げたい

リーダーシップよりも「伝える努力」の大切さを痛感

桶田陽子さんがJICA海外協力隊の存在を知ったのは小学生の頃。「CMで見て『かっこいい！私もいつか行きたい』と思ったのを覚えています」。その後、大学で農業を学び、農業普及員として8年間実務経験を積み、念願の協力隊としてインドネシアのボルネオ島へ。

「有機農業の普及を目的に派遣されたのに、資金不足でもともと農薬や化学肥料を使っていませんでした」と桶田さん。それでも農家と交流するにつれ、解決すべき課題が見えてくる。赤道直下にあるボルネオ島は気候が安定しているため、葉物野菜が一年中収穫できる。そのため野菜は安く買い叩かれ、農家の収益につながらなかった。そこで桶田さんは、ネーミング方法など商品の付加価値の上げ方をアドバイスしたり、スーパーマーケットに自ら飛び込み営業するなど、農家の収益向上に努めた。当初は「日本人がなんかやっている」と現地の人たちは一歩引いた感じだったという。「彼らにこの活動にどんな構想や意味があるのか伝える努力をしたことで、信頼関係を構築し、活動を進めることができました」と語った。

［現地での活動］インドネシア
INDONESIA



［帰国後の活動］岩手県遠野市
IWATE



働く中で年々感じる協力隊で得た経験の奥深さ

派遣以前、桶田さんは「開発途上国ではその土地ならではの文化や風習に触れられる」と期待していた。しかし実際には海外資本が入り、その地域ならではの文化や風習は失われつつあった。それを目の当たりにし、地域独自の文化を次の時代につないでいく、地に足のついた仕事がしたいと思うようになった。

そんな思いを胸に帰国し、地元岩手で参加した農業分野の合同企業説明会で現在の職場、農事組合法人宮守川上流生産組合に巡り合う。宮守川上流生産組合が目指すのは、地域農業を受け継ぎ、地域ぐるみでの集落営農を担う「一集落一農場」。そこに桶田さんは「やりたいことがここにある」と感じたという。

現在、桶田さんは副組合長兼農産物加工部長として農産加工品の開発や農業体験事業など様々な取り組みを進める。目指すのは農業で地域の収益を上げ、雇用を生むこと。「地域の方々との信頼づくりが何より大切。協力隊で経験したことが今の私の糧となっています」と話す桶田さんは自信に満ち溢れていた。



桶田さんが開発を手がける宮守地域の野菜をつかった野菜ジュース。





1 イスラム教の断食（ラマダン）明けの大祭で下宿先の家族と。伝統衣装の「クバヤ」を着用。
2 下宿仲間と夕方のおやつタイム。

Voice



農事組合法人宮守川上流生産組合
菊池 文彦さん

少子高齢化が進む地域の組合ですから、若い人材はとても貴重な存在です。桶田さんは家を建て、地域の行事にも積極的に参加して公私共に地域に溶け込み、地域を良くしようと頑張ってくれています。その発信力や行動力に感心します。仕事でも理事会や工場の運営など多くの人が関わる場面が多く、全体をうまくマネージメントできるのは、広い視野を持つ桶田さんだからこそ。住宅をシェアハウスとして提供し、農業体験でくる学生たちのお世話や地域の人たちが気軽に集えるような場づくりにも積極的。ますますの活躍を期待しています！



仕事の相棒である軽トラを乗りこなす桶田さん。

Message

自分自身の成長に
なくてはならない経験でした

協力隊に参加する前は「開発途上国の役に立ちたい」と思っていましたが、実際に経験して感じるのは「誰かのためというより、私自身が成長させてもらった」ということ。その思いは、帰国後すぐよりも、社会人になり、責任ある仕事をするようになってからの方が強くなっています。日本と異なる文化や習慣のなかで、活動を行う協力隊の2年間は、自らを成長させるチャンスです。

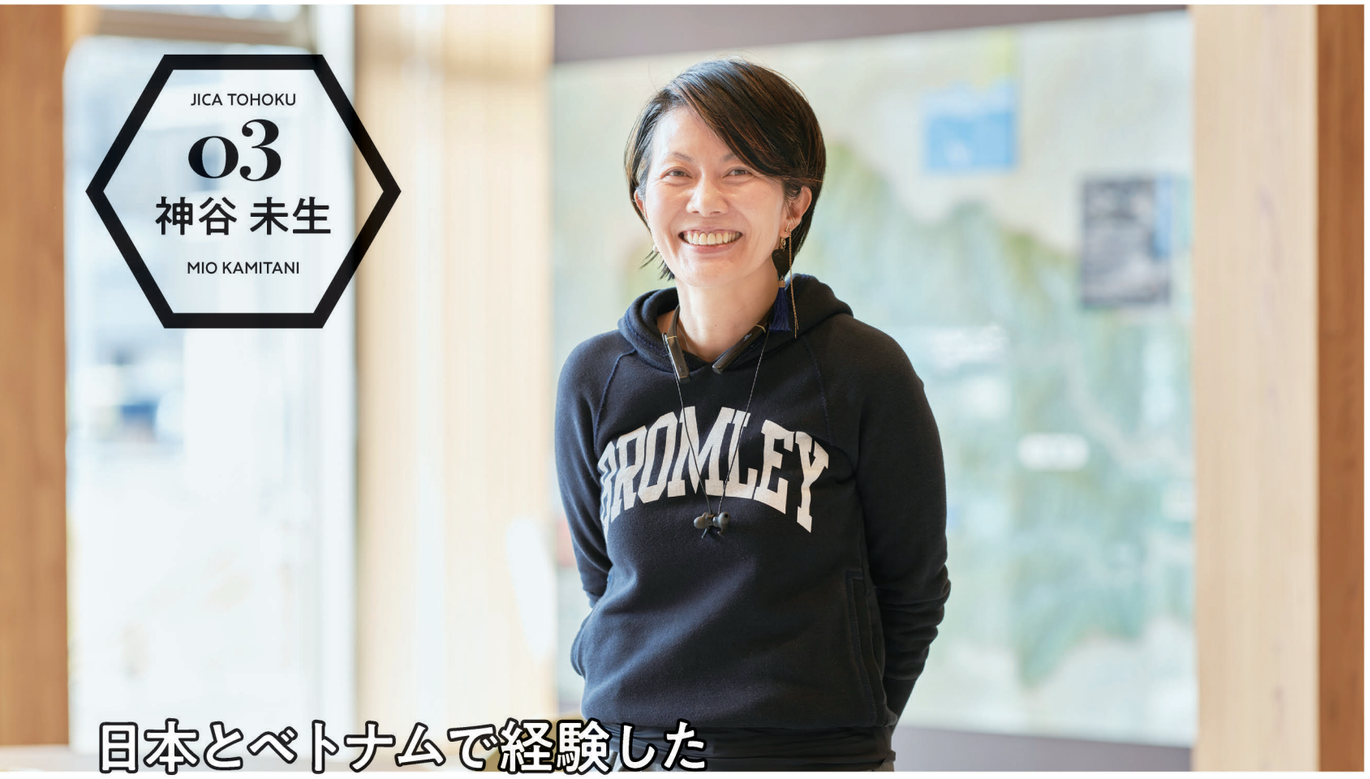
Profile

桶田 陽子

農事組合法人宮守川上流生産組合
副組合長兼農産物加工部長
［派遣国］インドネシア
［職種（活動分野）］野菜栽培

岩手県盛岡市出身。祖父母が遠野市で農家だったこともあり、農業に興味を持ち、大学では農業を専攻。社会人経験を経て、協力隊に参加。帰国後、農事組合法人宮守川上流生産組合に就職。現在は副組合長兼農産物加工部長として、遠野市の魅力を発信するための様々な事業に取り組んでいる。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU

03

神谷 未生

MIO KAMITANI

日本とベトナムで経験した コミュニティの力と 未来への可能性

ベトナムで知った「幸せの価値」

元々、国際公衆衛生学に興味のあった神谷未生さん。開発途上国の医療現場を経験したいという思いからJICA海外協力隊に参加した。

ベトナムの州立病院に派遣され、集中治療室での看護技術の指導や母子保健、栄養指導に取り組んだ。

「栄養失調の子どもたちが多く、調べると『ベトナム戦争で使った枯葉剤の影響が母乳に出るからあげていない』ことがわかりました。情報が正しく伝わっていないために、『母乳はすべてダメ』という思い込みが広がり、乳幼児の栄養失調が多かったのです」と神谷さん。経済発展が進むベトナムだが、一方で経済面や教育面の格差があり、それは情報格差にもつながっていた。そこで神谷さんは、乳幼児や妊婦の正しい栄養の取り方や衛生的な生活習慣についての指導にも積極的に取り組んだ。

一方で人生観を変える価値観との出会いもあった。「彼らは食事を家族みんなでする。そして食べる前に必ず『一緒に食べられて幸せだね』と言い合う。とても素敵でしょ。それは今でも実践しています」という。

［現地での活動］ベトナム社会主義共和国

VIET NAM



［帰国後の活動］岩手県大槌町

IWATE

しなやかに繋がる 大槌町のコミュニティ力

神谷さんは東日本大震災が発生した2011年3月に帰国した。すでに海外の大学院への進学が決まっていたが「何か自分にできることをしなければ」との思いから国際NGOの一員として東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県大槌町へ入り、ボランティア活動にあたる。「避難所の運営やボランティアの調整などを担っていた町民がしなやかに繋がって見事に対応しているのを見て、日本にもこんなコミュニティがあったのかと感動しました」と神谷さん。

その後、神谷さんは大槌町へ移住。「一般社団法人おらが大槌夢広場」に参加し活動を行う。被災地だからこその「生きた学び」を県内外からの訪問者に伝える伝承活動に取り組んでいる。「危機的な状況に置かれた時に何をどう考え、どう行動するかが重要。決断の連続なんです。そのプロセスを『決断のワークショップ』として疑似体験してもらっています」と神谷さん。語り部の中心メンバーとして活動しながら、若い世代の指導にも積極的。移住定住者のサポートにも取り組むなど、コミュニティ活性化のリーダーとして幅広く活躍する。



おらが大槌夢広場では、海外からの研修生受け入れも行う。



1



2

1 州立病院の集中治療室で、患者さんのケアを地元のナースと一緒に行う。2 仲良しの家族や近所の方と夕食。至福のひととき。

Voice



一般社団法人
おらが大槌夢広場
五十嵐 蘭さん

神谷さんのことは高校生の頃から知っています。海外経験も豊富で、英語も話せてかっこいいなと憧れていました。今、おらが大槌夢広場で一緒に働くようになって感じるのは、神谷さんは優しさに溢れているということです。もちろん行動力や知識の豊富さは素晴らしく、尊敬していますが、私たちスタッフ一人ひとりにきちんと向き合い、どんな時も支えてくれます。子育てしながら、オンとオフを大事にして働く姿も見習うことが多いと感じます。



町内外の教育旅行や企業研修を受け入れ、震災擬似体験プログラムを行う。

Message

海外に興味があるなら まずは行動してみよう!

「国際協力に興味がある、行ってみたい」という気持ちがミリでもあるならば挑戦することをお勧めします。将来、どんな仕事につながるかとか何に役立つかは人それぞれですが、協力隊に参加し経験を積むことで、幅広い視野や対応力を養うことができます。

Profile

神谷 未生

一般社団法人おらが大槌夢広場　事務局長

［派遣国］ベトナム

［職種（活動分野）］看護師

名古屋市出身。アメリカの大学へ留学し、正看護師資格を取得し大学病院に勤務。海外派遣医療団も経験したのち、協力隊としてベトナムで活動。帰国後は、国際NGO職員として大槌町へ入り、東日本大震災の復興支援にあたる。その後ロンドン大学大学院で国際公衆衛生学取得。現在は、おらが大槌町夢広場の事務局長を務める。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU
04
青木 淳
ATSUSHI AOKI

家族や仲間を大切にし地域とのつながりを大切にする生き方をしたい

［現地での活動］ケニア

KENYA



サッカーを通じて伝えられたチームワークの大切さ

NPO活動で海外に学校を造る活動をしていたこともあり、JICA海外協力隊で選んだ分野は青少年活動。ケニアのカカメガという街の更生施設に派遣された。そこでは軽犯罪を犯した子や家庭の事情で学校へ行けない子どもたちが共同生活を送っていた。

「国語や算数など日本と同じようにカリキュラムがあるのですが、体育を教える先生がいないということで、スポーツ好きの私が教えることになりました」と話す青木淳さん。空き巣被害に遭うショッキングな出来事はあったものの、校長先生や周りの先生のバックアップもあり、得意のサッカーで子どもたちとの距離を縮めていった。

「最初はルールを理解せず、試合中にすぐケンカしていましたが、だんだんとルールやチームワークの大切さを理解しはじめ、最後には、相手チームにルールを指導するまでになってくれました」。子どもたちの変化は先生や地域にも伝わり、地域の人々が子どもたちのサッカー活動を応援し、地域をあげて盛り上がるようになったという。

［帰国後の活動］宮城県岩沼市

MIYAGI



一人ひとりが「その人らしく」地域と関わっていくために

帰国した青木さんは、協力隊経験者が中心となって設立した公益社団法人青年海外協力協会(JOCA)の一員となった。当初は東京で活動していたが、東日本大震災が発生し、東北の復興支援に入った。

「私は岩沼市に入り、仮設住宅での自治会の形成やコミュニティづくりのサポートを担当しました」と青木さん。その後、岩沼で「生涯活躍のまち」を目指すプロジェクト「IWANUMA WAY」が誕生し、JOCA東北が運営を担当。障がいのあるなしや年齢、国籍の違いを超え「ごちゃまぜ」に人々が関わり合えるまちづくりが進められている。現在、青木さんは岩沼市障害者地域就労支援センター「ひまわりホーム」の園長を務める。

青木さんは、「ひまわりホームは、障害のある方が本人の能力を活かしながら軽作業、接客、調理等の仕事に関われる施設です。中には、一般就労を目指してステップアップする方もおり、一人ひとりにあった働き方や地域との関わり方など選択肢を広げる支援ができればと考えています」と語った。



「JOCA東北」が運営する岩沼市の複合拠点施設。



サッカークラブでの試合後のミーティング。



現地チームと日本人チームとの交流イベント。

Voice



公益社団法人 青年海外協力協会
常務理事
JOCA東北代表 北野 一人さん

青木さんは東日本大震災以降、被災された方々に対して温かな支援を続けてきました。その後、福祉事業所での勤務に就くことになると大学に入って専門知識を修得するという努力家でもあります。JOCAが全国で展開する地方創生プロジェクトの担い手として成長を続けてほしいです。



利用者の方々の作業の様子を優しく見守る青木さん。

Message

社会人経験を経ての挑戦もオススメです

学生時代から抱いていた海外への興味・関心から協力隊に参加しましたが、日本のことを理解したり、専門分野を深めてから参加してもよかったのかなと思うことがあります。例えば、現在の仕事を考えると福祉の実務経験を経てから海外の現場に出ていたら、もっと深い知識を得て、今の仕事に活かせたのではないかなと思います。

Profile

青木 淳

公益社団法人青年海外協力協会
岩沼市障害者地域就労支援センター「ひまわりホーム」園長
［派遣国］ケニア
［職種(活動分野)］青少年活動

学生時代、バックパッカーで東南アジアを周った経験があり、現地の人々の優しさに感銘を受け国際協力活動への興味を持つ。大学卒業後、企業で働く傍らNPO活動でネパールに学校を造る活動に参加。その後国際協力への思いを叶えるため協力隊としてケニアへ。帰国後はJOCAに就職し、宮城県岩沼市にて東日本大震災の復興支援に携わる。現在、岩沼市障害者地域就労支援センター「ひまわりホーム」の園長を務める。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU

05

吉澤 雅人

MASATO YOSHIZAWA

自分を必要としてくれる その喜びが 次のエネルギーになる

言葉の壁を乗り越え 通じた仕事への情熱

「JICA海外協力隊経験者の友人がいて、自分も興味があったので応募しました。でも結果は不合格。その友人がNGO活動でウガンダとシエラレオネへ視察に行くというので同行しました。そこでパームオイルを製造する活動にも参加しました」と話す吉澤雅人さん。帰国後、再び協力隊に挑戦し見事合格。派遣されたのはザンビアだった。

担当はキノコ栽培と養蜂の指導、そして農業支援施設のマネジメント。現地の農家や普及員は農業の知識はあったが、実践力が不足していた。そこで吉澤さんは一緒に作業をしながら活用の仕方を伝えることにした。慣れない雨季の通勤に苦労したり、蜂に刺されるアクシデントもあったが製品化し、販売した蜂蜜は地元の人々に好評だった。

［現地での活動］ザンビア

ZAMBIA



「大変だったのは言葉。現地の人たちは英語を理解できるのに私が話せない。でも現地のカウンターパートが聡明な人で代わりに説明してくれたり、言い間違いを教えてくれたりとても助かりました」と吉澤さん。仲間と共に、技術を伝えようと日々懸命に働く吉澤さんの努力は周りにも伝わっていった。「言葉は下手だけど、毎日やっていることを見てくれる人がいて、評価してくれた。それは嬉しかったですね」と懐かしそうに当時を振り返った。

［帰国後の活動］宮城県丸森町

MIYAGI



ザンビアと丸森での経験 次の国に活かしたい

吉澤さんの現在の職場は宮城県丸森町の石塚養蜂園だ。丸森町はザンビアに派遣される前に訪れ、滞在。石塚養蜂園では養蜂を、もう1軒の農家ではキノコ栽培について学んだゆかりの地なのだ。

「帰国後、丸森町を訪問した際に『ここでアルバイトしてみたら』と誘ってもらったのがきっかけです」と吉澤さん。蜜源を求め全国を移動する養蜂家が多いが、石塚養蜂園では丸森町を拠点として、自然豊かな東北を中心に季節ごとの蜜源を得て、味わいの違う蜂蜜や加工品を商品化している。

また、丸森町では、以前から在来技術を活用したザンビアの小規模農家への農業技術協力『ザンビア・丸森プロジェクト』に取り組んでおり、吉澤さんもザンビアから来た研修生4人のまとめ役を務めたり、ザンビアに行ってワークショップを開催するなど様々な活動の中心メンバーとしても活躍。

そんな吉澤さんの次の目標は「NGOで訪れたシエラレオネでの養蜂への挑戦」だという。「最初に訪れた時の衝撃が大きく、今も苦しい状況が続いています。何か自分にできることをしたい」と話す吉澤さんの目には強い光があった。



石塚養蜂園の蜂蜜。色の違いは蜜源の違い。



現地の同僚とともに巣箱内の検査。



蜂蜜の収獲。



植菌したきのこの経過観察を記録。

Voice



株式会社石塚養蜂園
石塚 武夫さん

吉澤さんは一言でいうと「ムードメーカー」。ザンビアでの話を聞いても、丸森での働きぶりを見ていても、人種関係なく相手の懐に入るのが上手いなと感じます。英語が苦手だというのですが、言葉に限らずコミュニケーションの取り方が素晴らしいのだと思います。丸森で年代も違う人たちの中に入ってもいつの間に地元の人のように溶け込んでいるんです。本人はアフリカに行って養蜂の仕事をしたいと言っています。協力できることはして、こちらの仕事と上手くリンクさせて活動の幅を広げられたらなと思っています。



次の採蜜に備え、巣箱の手入れをする吉澤さん。

Message

自信がなくても大丈夫!
チャレンジしてみよう!

協力隊は優秀な人が参加するとイメージしている方が多いかもしれませんが、そんなことはありません。語学が苦手だった私も参加できて、評価してもらうことができました。興味がある方にはぜひ協力隊に参加して欲しい。世界に行って様々な経験をすることで日本人であることの素晴らしさを実感できます。

Profile

吉澤 雅人

石塚養蜂園

［派遣国］ザンビア

［職種（活動分野）］野菜栽培

三重県四日市市出身。高校卒業後、農業関連の企業に就職。友人とともにウガンダとシエラレオネでのNGO活動の視察に同行し帰国後、協力隊へ応募。ザンビアへ派遣される。帰国後は、派遣前に農業研修で訪れていた宮城県丸森町へ移住し、石塚養蜂園で養蜂の仕事に就く。丸森町が取り組む『ザンビア・丸森プロジェクト』の活動にも携わる。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU

06

野辺 理恵

RIE NOBE

海外の人材確保が難しい地元企業のために経験と専門技術を活かす

[現地での活動]モザンビーク

MOZAMBIQUE



「理解してもらう」ために伝えることの大切さを実感

中学時代、JICA海外協力隊に興味を持っていたという野辺理恵さん。偶然目にした隊員募集の広告がきっかけで説明会に参加したところ、興味が再燃して参加を決断した。

理系の大学を卒業していたことで中等教育学校の物理教師として活動。野辺さんは「派遣先の学校にとって、私は初めての協力隊員だったんです。子どもに教えた経験がない上に言葉も分からないため、初めは意思疎通が難しかったですね」と派遣当初について語る。授業では実験を担当した。「最初に授業を見学した時、子どもたちは板書を写すだけで内容を理解していないと感じました。物理は現象を見れば理解できる教科です。だから実験の授業を行うことを提案したんです」。許可はされたものの、学校には実験の道具が2セットしかない。野辺さんは実験装置を作ることから始めた。「豆電球と電池で電気回路の実験を行った時は、光った瞬間に子どもたちから大拍手が起きました」。子どもたちの喜ぶ様子を見て、野辺さんは「実験を取り入れた授業方法を地域のほかの学校とも共有できないか」と3日間のセミナーを計画。セミナーでは実験の内容をまとめたテキストを配布し、授業を実践して見せた。「多くの先生方に、実験室がなくても工夫次第で何とかできるんだ、ということが伝わり嬉しかった」と振り返る。

[帰国後の活動]秋田県秋田市

AKITA



企業支援や人材育成の仕事で異文化対応の力を発揮

現在、野辺さんは秋田県産業技術センターで研究員として勤務している。専門はプラスチック成形加工技術の研究。秋田県の産業に関わる人たちとの共同研究による企業支援や、人材育成にも携わる。協力隊に参加する前と後で、自分自身大きな変化を感じているという野辺さん。「以前は仕事をしていても、他人に頼んで遅くなるくらいなら自分でしてしまうタイプでした。でも今は、一緒に取り組みながら相手に教えて、まずは覚えてもらうことを優先に考えるようになり、気持ちにゆとりが持てたように感じます」と話す。日本とはまったく違う環境で異文化の方たちとふれ合う中で、野辺さんが学んだことは、理解してもらうための最大限の努力をすること。「わかってくれるだろう、という考えは外国人相手には通用しないんです。自分の意見をきちんと伝えることで、相手も理解を示し可能性も広がると思います」。今後、日本の企業では海外人材の確保が欠かせなくなる中、協力隊でさまざまな人と関わった経験を活かし、「専門的技術で日本と世界の架け橋となり工業分野の発展に貢献したい」と意欲を見せる。



射出成形機を操作中。



ペットボトルロケットを使った授業。



教師対象の実験セミナー。



同僚たちと。

Voice



秋田県産業技術センター
所長 佐藤 明さん

野辺さんは研究員として高いコミュニケーション能力を持ち、何事にも物怖じせず、持ち前のバイタリティで企業の抱える課題解決に向けて対応しています。自分が「やるべきこと、できること、やりたいこと」を考えて実行できます。今後も地域企業との交流を積極的に行い、秋田県産業の振興のために取り組んで欲しいです。



プラスチックの強度をチェックする野辺さん。

Message

互いの文化を受け入れ取り組む充実感も!

活動1年目は言葉がわからなくて不安な面が多かったですが、2年目に入る頃には毎日が楽しかったです。慣れてきたというのもありますが、お互いがお互いの文化を受け入れ一緒に取り組んでいくことに充実感を感じられます。また、協力隊に参加した仲間とは帰国後も交流が続き、家族ぐるみの付き合いをしています。もし少しでも興味を持ったなら、挑戦して後悔はしないはずです。

Profile

野辺 理恵

秋田県産業技術センター研究員

[派遣国]モザンビーク

[職種(活動分野)]理数科教師

大学卒業後、一般企業の研究開発職として勤務したのち、協力隊に参加。帰国後は、秋田県産業技術センターに就職し、研究員として勤務しながら博士号を取得。協力隊の経験を活かし、高校の理科教員および退職教員と子ども対象のサイエンスキャラバンなどを実施。秋田県の国際理解教育促進にも取り組む。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU

07

小林 みずほ

MIZUHO KOBAYASHI

誰かの可能性を広げるために
人に寄り添い、根気強く チャレンジしていきたい

自分ができることで 国際協力をしたい

JICAの短期ボランティアとして、ガーナでの活動経験のある小林みずほさん。そこで印象に残ったのは「一緒に活動していたJICA海外協力隊員が現地の人々と向き合い、一生懸命活動する姿」だった。帰国後は、山形国際ドキュメンタリー映画祭に携わり、映画を用いた地域活性化に取り組む。「自分ができることで国際協力をしたいという想いと、新しいことにチャレンジしたいという想い」が強くなり、協力隊への応募を決意した。

派遣されたのはエクアドルの児童労働根絶のためのNGO団体。貧困層の家庭や学校の訪問や市場調査をしながら、子どもたちが無料で参加できる日本語や折り紙、手芸などの講座を実施。親の理解が子どもの教育に大きな影響を与えることから、母親の意識向上のためのグループに携わる。母親自身の暮らしにも役立つリサイクル生活用品作りの活動にも取り組んだ。また、プライベートの時間を利用し、仲間と共に日本映画の上映や日本文化講座、「広島・長崎原爆展」などのイベントも行った。

「時間や物事のとらえ方の違いから、意見を戦わせたこともありましたが、最後は『日本人は時間を守る、相手の時間も大切にする』などの違いや気づきを残すことができ、日本文化に興味を持つ人も増え、中には日本に留学する人も。何かしらの足跡を残せたのかなと嬉しかったですね」と語った。

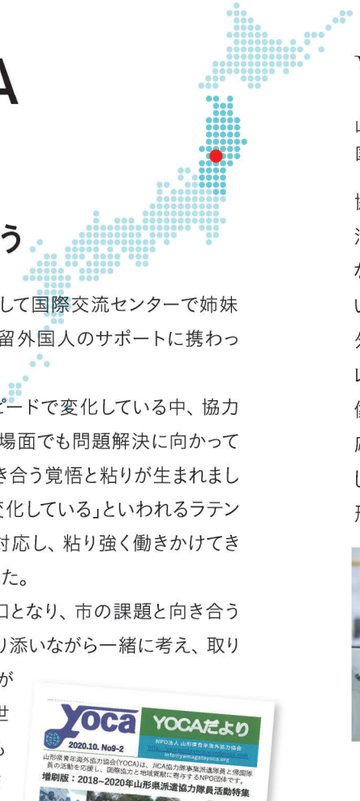
［現地での活動］エクアドル

ECUADOR



［帰国後の活動］山形県山形市

YAMAGATA



市民に寄り添い、 共に課題に向き合う

現在、小林さんは山形市職員として国際交流センターで姉妹都市交流や外国人相談窓口で在留外国人のサポートに携わっている。

「帰国後、世界がものすごいスピードで変化している中、協力隊に参加していたからこそ、どんな場面でも問題解決に向かって働きかけ、根気強く人や現場に向き合う覚悟と粘りが生まれました」と話す小林さん。「明日は常に変化している」といわれるラテンアメリカで変化を受け止めながら対応し、粘り強く働きかけてきたことが自分自身の成長につながった。

地方自治体の仕事は市民の窓口となり、市の課題と向き合う仕事。協力隊が地元の人たちに寄り添いながら一緒に考え、取り組む草の根の活動と共通するものがあるという。日本の良さと同時に世界に学ぶべき課題に気づけたことも収穫だ。世界的な視点を持ち、市民に寄り添い、チャレンジする小林さんには今、多くの信頼が寄せられている。



YOCA（山形県青年海外協力協会）の活動にも参加。



1 配属先の子どもたち。



2 エクアドルのホストファミリーと友人たち。



配属先での日本文化講座。

Voice



山形市総務部 国際交流センター
国際交流係長 加藤 慶子さん

協力隊に行く前から、映画祭の運営業務などに関わり、活躍されているのは知っていましたので、山形市職員になったと聞いて心強く思いました。一言で国際交流といっても取り組むべき課題は多岐にわたりますし、在留外国人のみなさんの暮らしに関わる幅広い相談事にフレキシブルに対応しなくてはなりません。そのためには想像力が重要になってきますが、小林さんは経験値や適応力が高く、外国人の視点で相手の状況を的確に理解し、複雑な課題にも丁寧に対応しています。これからも山形と世界をつなぐ存在としての活躍を期待します。



コロナ禍でオンラインでの相談も増えた。

Message

世界の見方が変わり、その経験は生き続ける

協力隊では、まだ知らない世界の現実に出会え、人と自分自身の可能性にも出会え、世界の多様性を知り、自分の常識や世界がほんの一部に過ぎないことに気づけます。一方で、活動することでわずか一部でも世界や周りの環境を変えられます。協力隊に参加し、その国の課題解決に取り組むことで、誰かとその国の可能性をちょっとだけでも広げることができたら、それは必ずあなたのためにもなり、その経験はずっと生き続けます。

Profile

小林 みずほ

山形市総務部 国際交流センター 主任

［派遣国］エクアドル

［職種（活動分野）］青少年活動

幼い頃から身近に外国人や海外文化と接する機会があり、国際協力に興味を持つ。バンコク日本人学校養護教諭やドキュメンタリー映画祭スタッフ等を経て協力隊に参加しエクアドルへ派遣される。帰国後、再びエクアドルに戻り、大学の日本語講師として勤務。その後、山形市職員に採用される。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

「共創と環流」めぐり逢いから学ぶ

～JICA海外協力隊グローカルプログラム～

JICA は派遣前訓練の一環として国内の地域活性化や多文化共生を実践から学ぶ75日間の地域密着型実習『JICA海外協力隊グローカルプログラム』を全国で展開しています。東北地方では現在、岩手県釜石市、陸前高田市、遠野市、秋田県の五城目町が受入れを実施しています。また、プログラム終了後も派遣中に赴任国からオンライン交流の実施、帰国後も地域と関係を継続し、地域の活性化を推進する人材となるべく支援しています。

主なプログラム実施先等の詳細はこちら

東日本大震災を通じ、“復興支援”から“国際協力”へと発展した地域連携



※主な受け入れ先(自治体)は都度、変更があります。

＼ 参加者Voice ／

遠野

樋口 紗穂



[隊次]2023年度3次隊
[出身]神奈川県
[派遣国]ミクロネシア
[職種]環境教育
[活動先]農業組合法人 宮守川上流生産組合

岩手県遠野市のいわゆる”ド田舎”、宮守町の農事組合法人で活動をしました。農作業や農産物加工場での製造作業など、全てが新鮮で楽しかったです。何より、宮守の皆さんが本当に優しく、明るく、面白い人ばかりで、すぐに大好きになりました。

永遠の日本のふるさと遠野



永きにわたり地域に根差し、伝承される郷土芸能

私の人生史に大きく刻まれた75日間。

協力隊の活動後、必ずまた宮守へ、皆さんに会いに行きたい。と、本心でそう思います。「また会いたい」と思える大切な方々とこの宮守でたくさん出会えたこと。これが、私が一番、グローカルプログラムに参加して良かったと思えることです。



遠野祭りにて披露した伝統芸能、神楽



廃棄ビンや葬儀場から大量廃棄されるろうそくを再利用したエコキャンドル

＼ 参加者Voice ／

陸前高田

平沼 里穂子



[隊次]2023年度4次隊
[出身]岩手県
[派遣国]ウガンダ
[職種]コミュニティ開発
[活動先]合同会社ぶらり気仙

東日本大震災から復興し、新たな挑戦を続け、一歩一歩前進していく陸前高田市。地元の皆さんは、よそ者の私を広田湾のように広い心で受け入れてくれ、奇跡の一本松のような力強さで送り出してくれました。自然、特産品、人の温かさ、すべてがこの地域の魅力です。

ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり 陸前高田



大震災からの復興に向けた希望の象徴「奇跡の一本松」

地域の課題を「勝手に決めつけない」。

地元・岩手を改めて見つめ直したいと思い希望したグローカルプログラム。活動するにつれて、大好きな地元のはずなのに、知らないことだらけだったと気付きました。現状に対する考え方は人それぞれで、長所と短所は表裏一体。「よそ者」だからこその視点で、新たな地元の魅力を発見するきっかけになれていたら嬉しいです。



広田湾が育む牡蠣の出荷に向け、ひとつずつ殻を叩いて剥がす作業



地域ブランド米「たかたのゆめ」の魅力化イベント

Message

JICA東北 所長
花立 大民



JICA海外協力隊の「繋げる力」を活かす

開発途上国を舞台に活動するJICA海外協力隊は、まさに世界の人々と日本の人々との絆を結ぶ「グローカル人材」。協力隊員が派遣前に東北地域のパートナーと共に地域活性化のお手伝いをして、絆づくりに励んでいます。東北で培った課題解決力や地域と共創する力を派遣国での活動に役立てつつ、協力隊派遣後も派遣前に培った絆をもとにさらに地域活性化に貢献されることを期待しています。

日本も世界も元気にする東北人！熊本経由、海外へ！

人生における第2ステージ！

60歳で海外協力隊へとキャリアチェンジした私は、ここ熊本県玉東町で第2ステージの卒業を迎えることが出来ました。主な活動は玉東町役場でのウクライナ避難民の就労支援でした。玉東町が歩む多文化共生への道のりを少しでも一緒に歩むことが出来たことは、幸せに思います。

澤村 啓之

[隊次]2023年度4次隊
[出身]宮城県仙台市
[派遣国]インド
[職種]マーケティング
[活動場所]熊本県玉東町





地元小中学生を対象にした国際交流企画にて異文化理解教育を実施

＼ 参加者Voice ／

五城目

平石 守



[隊次]2023年度4次隊
[出身]神奈川県
[派遣国]ボツワナ
[職種]コミュニティ開発
[活動先]一般社団法人 ドチャベンチャーズ

実際の活動は、五城目の小中高校生との交流、町の朝市出店、井戸掘り、仮装、森山に登る等様々です。認めてもらいやすい表面的なことをするより、一人ひとりが生き生きと暮らせるためのサポートの大切さを五城目で教えてもらいました。

世界一子どもが育つまち 五城目



人々の「日常」として現在も愛される五城目朝市

派遣前の貴重な時間、どう過ごすか？ いやいや、絶対グローカルプログラムっしょ！

「誰と、何を、誰のためにするか」、すべてあなた次第です。前を向いて、未来に向かって生きる、思いやりに溢れた町の方々と共に、あなただけの活動が待っています。たった75日間ですが、五城目町の方々と作り上げる活動を通して、自分自身の成長が体感できるのがグローカルプログラムです。



訪問先の中学校で生徒から素敵なメッセージを頂いている瞬間



町の人が集まり熊料理やカレーを持ち寄ったり、特技の茶道でおもてなししたり

＼ 参加者Voice ／

釜石

江原 崇裕



[隊次]2024年度1次隊
[出身]島根県
[派遣国]スリランカ
[職種]環境教育
[活動先]一般社団法人 三陸駒舎

岩手県釜石市の中心部から西に約20kmの地、橋野町。古く昔から、馬とともに暮らす生活の根付いたこの地で、ホースセラピーを行う三陸駒舎で活動をしました。優しい人、豊かな自然、馬に囲まれたおおらかな土地で、気づけば穏やかな心になります。

鉄と魚とラグビーのまち 釜石



青空の下、海と街を見守る釜石大観音

馬と向き合い、自分と向き合う時を過ごす。

グローカルプログラムへの参加を悩んでいる方へ。悩んだ時点で、参加することをお勧めします。活動を通じて、自分の強みや弱みが浮き彫りになり、自分の内面と向き合います。その時が自分を変えるチャンスです。新たな「自分」に出会いに、1歩踏み出しましょう。



根浜レストハウス(釜石DMC)で3.11の追悼の祈りを込めた竹灯籠の制作



ホースセラピーを活用する為に、馬を知る第一歩となる調馬索（馬の運動）

JICA海外協力隊について

JICA海外協力隊の事業概要

JICA海外協力隊は、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施するボランティア事業です。開発途上国からの要請（ニーズ）にもとづき隊員を派遣し、現地の人々と共に開発途上国の課題解決に取り組むことを目的としています。
活動分野は9分野190以上の職種があり、農林水産、教育、社会福祉、スポーツなど多岐にわたります。
自分の持っている知識や技術、経験を活かせるのがJICA海外協力隊の特徴です。

JICA海外協力隊の活躍分野

計画・行政

国・地域づくりに関わるシゴト

- コミュニティ開発
- コンピュータ技術
- 行政サービス
- 防災・災害対策 など

農林水産

食べ物や自然に関わるシゴト

- 野菜栽培
- 家畜飼育
- 食用作物・稲作栽培
- 土壌肥料 など

鉱工業

ものづくりに関わるシゴト

- 電気・電子機器
- 自動車整備
- 建設機械
- 食品加工
- 金属加工 など

人的資源

教育やスポーツなど人を育てるシゴト

- 小学校教育
- 幼児教育
- 青少年活動
- 環境教育
- 各スポーツ職種
- PCインストラクター
- 日本語教育
- 体育 など

保健・医療

いのちに寄り添うシゴト

- 看護師
- 感染症・エイズ対策
- 理学療法士
- 病院運営管理 など

社会福祉

福祉に関わるシゴト

- ソーシャルワーカー
- 障害児・者支援
- 高齢者介護 など

商業・観光

マーケティングや観光に関わるシゴト

- 輸出振興
- マーケティング
- 経営管理
- 観光 など

公共・公益事業

生活サービスに関わるシゴト

- 土木
- 建築
- 下水道
- 廃棄物処理
- 上水道
- 番組制作 など

エネルギー

エネルギーに関わるシゴト

- ガス・石油・石炭
- 電力
- 再生可能・省エネルギー など

お近くのJICA窓口

JICA海外協力隊や国際協力に興味のある方、開発途上国の現状を知りたい方、
企業・団体、個人問わずご相談を受け付けておりますので、お気軽にお近くのJICA窓口までお問い合わせください。

自治体、民間企業、学校関係者の方

- 職員をJICA海外協力隊として派遣してみたい
- JICA海外協力隊経験者を採用したい
- 児童や生徒にJICA海外協力隊の体験談を聞かせたい

JICA海外協力隊に興味がある個人の方

- JICA海外協力隊経験者とお話ししてみたい
- 制度やJICAの支援体制を聞いてみたい
- 自分も参加できるか相談したい
- 国際協力や開発途上国についてお話を聞きたい



青森デスク
〒030-0803 青森県青森市安方1-1-40
青森県観光物産館アスパム7F
（公財）青森県国際交流協会内
Tel：080-3140-2129
E-mail：jicadpd-desk-aomoriken@jica.go.jp

岩手デスク
〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1
いわて県民情報交流センター5F 国際交流センター内
Tel：019-654-8911
E-mail：jicadpd-desk-iwateken@jica.go.jp

JICA東北
〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービルディング20F
Tel：022-223-4772
E-mail：jicathic-jv@jica.go.jp

秋田デスク
〒010-0001 秋田県秋田市中通2-3-8
秋田総合生活文化会館（アトリオン）1F
（公財）秋田県国際交流協会内
Tel：080-2809-5541
E-mail：jicadpd-desk-akitaken@jica.go.jp

山形デスク
〒990-8580 山形県山形市城南町1-1-1
霞城セントラル2F（公財）山形県国際交流協会内
Tel：023-646-6267
E-mail：jicadpd-desk-yamagataken@jica.go.jp

福島デスク
〒960-8103　福島県福島市舟場2-1
（公財）福島県国際交流協会
Tel：024-524-1315
E-mai：jica_fukushima_desk@jica.go.jp

JICA二本松（二本松青年海外協力隊訓練所）
〒964-8558　福島県二本松市永田字長坂4-2
Tel：0243-24-3200
E-mail：jicanjv-bk@jica.go.jp



JICA東北

独立行政法人 国際協力機構

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4丁目6番1号 仙台第一生命タワービルディング20F

TEL 022-223-4772 FAX 022-227-3090

JICA東北

2024年3月発行